

「1年の計は元旦にあり」とか「国家100年の計」など年を単位としたいろいろの物事の考え方がある。人間の限界寿命は120年位と言われているので、我々が物事を考える時間の単位として、この100年という数字にこだわって、標記のような題での一考を試みることにした。

今を去る100年を遡れば明治20年頃となる。1889年には旧憲法が發布され、我が国が近代国家として歩み始めた頃である。逆に下って100年先は？と考えた時にもおぼろげながら見当がつこう。生活は豊かになり、労働時間は大巾に短縮されロボット化される。ただゆとりの出来た時間をうまく調和させる別の知恵が要る。さもないと故人いわく「小人閑居して不善を為す」と言うことになる。

しかし、1000年の昔となれば平安時代となり、その時代相は歴史書でしか知ることができない。まして1000年後の地球の事など想像することもできまい。

防災技術を考える上においても、毎年起る災害に対して、10年に1度位ある災害に対して、100年に1度の確率のものに対して等々のランク付けが考えられ、それは投資効果と被害額との見合いで処理されるであろう。幸にして我が国では

最近あまり“大”災害にお目にかからなくなったのは10年の単位で考える対策がある程度行き渡ったせいではないだろうか。現在重要な河川は100年に1度の災害に耐えるように考えられていると聞いたが、その

辺に要求とコストとのバランス点を見出すのが妥当な線なのだろう。

火災にしても100年に1度という大火になれば1回に3桁の家屋が焼失するであろう。酒田の大火を最後に今の所起っていない。10年に1度位のもは2桁の家屋の焼失ということで考えると、まだパラパラと記録がある。昭和62年版消防白書の火災統計から逆算すると、人は1生(100年)に0.03度本人が火災に逢う割合になり、建物は1000年に1回火災に逢う割合になる。30年前のものと比較すると、人口も建物火災件数もほぼ同じ割合で増加している。何か消防力の充実を証する数字はないものかと探したら、ありましたありました、1件当りの焼失棟数が1.60と1.34、さらに1件当りの焼失

面積が103㎡から51㎡へと半減しているのが分ってほっとしました。実感として大火が減っている感じが統計数字の上で確認されましたので。

随 想

一〇〇年の計

山 鹿 修 藏

自治省消防庁消防研究所長
火災原因調査要領研究委員会委員長